

実践報告

看護専門学校における入学後間もない学生が 教員へ発信する情報 — 学生支援ツールに書かれた内容より —

Using a Student Support Tool for Newly Enrolled Nursing Students

鈴木 由依子^{1) 2)}, 片山 美穂²⁾, 北岡 和代²⁾

Yuiko Suzuki^{1) 2)}, Miho Katayama²⁾, Kazuyo Kitaoka²⁾

¹⁾ 金沢大学医薬保健学総合研究科保健学専攻, ²⁾ 公立小松大学保健医療学部看護学科

¹⁾ Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kanazawa University

²⁾ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Komatsu University

キーワード

看護専門学校, 看護学生, 学生支援, 内容分析

Key words

Nursing school, Nursing student, Support for Students, Content analysis

要 旨

目的：3年課程の看護専門学校の1年生が学生支援ツールの自由記載欄に記載した内容から、入学後間もない学生が発信する情報の特徴を明らかにする。

方法：A看護専門学校の1年生と2年生72人に研究の内容を口頭で説明し、学生支援ツールを研究者へ提出してもらった。回収した学生支援ツールのうち、入学直後の4月と5月の自由記載欄に書かれた内容を用いて分析した。

結果：学生11人から学生支援ツールを回収した。KH Coder 3において最も多く出現した語は「勉強」であり、出現回数は127回だった。「勉強」は他の語と語をつなぐ役割も担っていた。共起ネットワーク上作成されたサブグループは、どれも学校生活に関する語を含んでいた。学生支援ツールにおいて、友人関係の困難に関する表記は確認されなかった。

結論：学生は、「勉強」を中心とした学校生活に関する情報を教員に開示していることが分かった。

連絡先：鈴木 由依子

公立小松大学保健医療学部看護学科

〒923-0961 石川県小松市向本折町へ14番地1

はじめに

大学や専門学校で学んでいる看護学生は、多くの問題を抱えている。その内容は学業にとどまらず、精神的健康や人間関係、進路就職、家庭環境、自身の性格等、学校生活から日常生活にまで多岐にわたっている^{1) 2)}ことが知られている。また看護学生は、一般大学生と比較した時に、学校生活上のストレスやメンタルヘルスに関する問題をより抱えている³⁾ことが報告されている。

学生は友人や家族、恋人などに相談することでその解決の糸口を模索する⁴⁾が、その一方で、問題によっては自分自身で解決しようとする、あるいは何の対処もしないような場合も見受けられる⁵⁾ことが分かっている。そこには、学生の問題解決能力の低さや、学生本人だけでは解決できない問題という困難が存在する。さらに、ストレス要因が多いほど対処行動をとりにくいこと⁶⁾や、問題に対して十分に対処できないことがさらなるストレスとなり、抑うつ症状を呈する⁷⁾ことも明らかになっている。これらの先行研究より、看護学生が多岐にわたる問題に十分に対応できているとは言えないことが考えられる。

このような理由から、大学などの教育機関では、相談室の設置や担任制等の体制をとることで学生支援を行っている。しかし、自己解決志向が高いほど相談室への関心が低い⁸⁾ことがこれまでに明らかになっており、これは学生が一人で問題を抱え込みやすいという課題を示唆している。特に1年生は学校生活が講義中心となるため、教員との関係性に乏しく、教員をサポート資源だと捉えることが難しい⁹⁾ことが分かっている。

こうした背景の中、A看護専門学校では、学生支援を目的として独自に開発した学生支援ツールを用いて学生とのやり取りを行っていた。学生支援ツールは特に教員との関係性が希薄である1年生が、自分の抱える問題を吐露するきっかけとなるよう導入され、このツールを用いた学生支援は10年間程度実施されていた。しかし、書かれた内容の把握はその学生を担当した教員のみが行っていたため、入学後間もない学生が教員に当てて記載した内容の全体的な特徴は明らかではなかった。

入学後間もない学生がどのような内容を教員に向けて記すのかを知ることができれば、早期に学生の悩みに対応するための示唆が得られると考える。そこで、3年課程の看護専門学校の1年生が学生支援ツールの自由記載欄に記載した内容から、入学後間もない学生が発信する情報の特徴を明ら

かにすることを本研究の目的とした。

方 法

1. 対象

A看護専門学校の1年生と2年生72人を対象として、研究の内容を口頭で説明した。研究に協力する意思がある場合に、学生支援ツールを研究者へ提出してもらい、11人の学生支援ツールを回収した。大学1年生の悩みについて7月に調査した先行研究では、既に学生が進路上の悩みと学習に関する悩みを抱えていた¹⁰⁾ことが明らかになっている。本研究では、さらに早い段階で学生が教員へ発信していた内容を調査するために、回収した学生支援ツールのうち1年次の4月と5月の自由記載欄に書かれた内容を分析の対象とした。

2. 学生支援ツールの運用方法

学生支援ツールは、A看護専門学校で独自に開発した用紙(図1)を用いた。この用紙は、ファイルと共に入学当日のホームルームで学年担任から配布された。学生には、学校生活を支援するためにこのツールを使用すること、そして自分の担当以外の教員には記載内容が漏れないことが説明された。やり取りは交換日記形式で行われた。具体的には、学生は学生支援ツールにその日の体調や出来事などを自由に記して、翌日の朝に自分の担当教員のメールボックスに入れた。教員は回収した学生支援ツールを回収し、学生の書いた内容に対してその日のうちにコメントを書き、再びメールボックスに入れた。学生は帰宅時にメールボックスから学生支援ツールを取り出した。記載は学生の任意であった。学生からの相談や、気になる記載があった場合には、教員は学生支援ツールを通して学生に詳細を確認し、面談の提案等を行った。

3. 研究期間

2018年4月-2019年3月

4. 分析方法

データの分析には、内容分析の手法を用いた。これは、科学的に、学術的に、客観的にデータを分析することで、対象者の言葉(テキスト)に含まれる本質(特徴)をみることができるとされている¹¹⁾とされている。解析には、計量テキスト分析ソフトウェアであるKH Coder 3を用いた。KH Coderは、テキストマイニングを行うために開発されたフリーソフトであり、多変量解析によってデータを客観的に解析することができる¹²⁾ものである。

分析の手順は次のように行った。収集したデー

月・日・曜日	／ (月)	／ (火)	／ (水)	／ (木)	／ (金)	／ (土)	／ (日)
本日の自己理由	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
体調	良い・悪い ()	良い・悪い ()	良い・悪い ()	良い・悪い ()	良い・悪い ()	良い・悪い ()	良い・悪い ()
食事摂取	朝・昼・晩	朝・昼・晩	朝・昼・晩	朝・昼・晩	朝・昼・晩	朝・昼・晩	朝・昼・晩
睡眠時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間
睡眠の質	良・不良／不足	良・不良／不足	良・不良／不足	良・不良／不足	良・不良／不足	良・不良／不足	良・不良／不足
学習時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間
学習内容							
今日の感想 相談など							
教員より							

図1 A看護専門学校で使用された学生支援ツール

タは、未加工の状態Excelに入力し、データの前処理を行った。前処理は、分析対象ファイル内の文章から語を切り出し、その結果をデータベースとして整理するために使用した。回収した学生支援ツールの自由記載欄に記載されている全ての語を調査対象とした。KH Coder 3の頻出語検出機能を用いて、文章中の頻出語を出現数と共に抽出した。頻出語は、上位50語ほどが抽出されるよう、文章中の出現回数が15回を超えるものを抽出するよう設定した。次に共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークは、出現頻度の高い語に関連したネットワーク図を描画するために最小出現数が15回以上の語を選択し、語と語の詳細なつながりを確認するために、Jaccard係数を0.08以上に設定した。さらに、強い共起関係ほど濃い線で示されるように整えて描画した。また、共起ネットワーク図において、語と語の中継点となる中心的な役割を果たす語を抽出した。ネットワーク図では、中心性の高い語は青く、次いで緑色で示された。最後に、ネットワーク図で共起関係にある語をサブグループ¹³⁾に分類した。分析は、ネットワーク上に描かれた語の意味を解釈するために、素データに戻りながら行った。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、本研究の趣旨について口頭と書面で説明した。対象は研究に参加協力を得られる学生とし、協力は任意であること、途中棄権が可能であること、研究に参加しなかった場合でも不利益がないこと、データの匿名性と守秘性に

ついて説明し、同意を得た。研究は、A看護専門学校倫理審査委員会の承認 (No.2) を得て行った。

結 果

1. 研究参加者の概要

学生支援ツールを提出した11人の学生は全て女性であり、1年生が8人、2年生が3人だった。年代は10代が8人、30代が3人だった。また、3人が社会人学生だった。

2. KH Coder 3による語の抽出

回収した学生支援ツールのうち1年生の4月と5月の自由記載欄より、820の文章と6804の語が抽出された。

3. 頻出語

以下、抽出された語を「」、素データからの文章の抜粋を『』で示す。また、()の数字は語の出現回数を表す。

頻出語として、55語が抽出された(表1)。最も多く出現した語は「勉強」であり、出現回数は127回だった。素データでは『テスト勉強に集中できた』『学校終わったからたくさん勉強した』『3年間勉強頑張る』『生理学の勉強の仕方分からない』『バイトをしていて勉強時間取れていない』『どのような勉強をしたらいいでしょうか』等の記載が確認された。次いで多く出現した語は「思う(121)」であり、以下「今日(119)」「課題(94)」「テスト(80)」の順に多く出現した。

4. 頻出語の特徴

1) 学校生活とプライベート

表1. KH Coder 3 によって抽出された頻出語

頻出語	出現回数	頻出語	出現回数	頻出語	出現回数	頻出語	出現回数
勉強	127	自分	34	見る	23	家	17
思う	121	終わる	33	復習	23	久しぶり	17
今日	119	寝る	33	大変	22	出る	17
課題	94	練習	33	難しい	22	先輩	17
テスト	80	学校	32	ノート	21	解剖	16
時間	74	分かる	31	実習	21	帰る	16
生理学	64	覚える	29	早い	21	昨日	16
バイト	57	少し	29	疲れる	21	書く	16
授業	56	看護	26	ベッドメイキング	20	多い	16
頑張る	51	私	26	ゴールデンウィーク	19	土日	16
先生	49	子供	25	感じる	18	基礎	15
行く	48	人	25	最近	18	準備	15
明日	43	朝	25	不安	18	体育	15
楽しい	36	今	24	たくさん	17		

「勉強 (127)」の他にも、「授業 (56)」「学校 (32)」「看護 (26)」「実習 (21)」のように、学校生活に関する語が抽出された。一方、「バイト (57)」「家 (17)」のように、プライベートを表す語もまた確認できた。プライベートに関する語のうち最も多かったのは「バイト (57)」だった。「アルバイト」としても表現され、素データでは『バイトと勉強』『16時までバイトだった』等が確認された。

2) 自分と他者

自身のことを表す言葉として「自分 (34)」や「私 (26)」が確認できた。他者を表す語として「先生 (49)」「友達 (14)」、また『私の母』などの家族についての記載が確認された。頻出語として抽出されなかったが、素データの中には「友達」が確認された。『友達と勉強した』『友達と遊んだ』のように、友達と行動したことが内容として記載されていた。友人関係の悩みや相談に関する記載は確認されなかった。

3) 自分の感情

「不安 (18)」のように、気がかりな心情を表す言葉が確認された。この語は、『これからが不安です』『覚えることがたくさんありそうで不安』のように使用されていた。不安の内容は、勉強や試験、課題、授業準備など学業に関するものであった。その他、「頑張る」「楽しい」のように、意欲や肯定的な思いを示す語が確認された。

5. 共起ネットワーク分析

1) 中心的な役割を果たす語

ネットワーク図は、語と語をつなぐ線と、頂点となる語で形成された (図2)。頻出55語につい

てネットワーク図を描画すると、語の数は41、共起を示す線は42となった。語と語を繋ぐ中心的な役割を果たす語として、「勉強」「思う」の2語が抽出された。

2) 語のグループ分け

共起ネットワーク図の描画により、8つのグループが検出された (図3)。グループ1は8語で構成され、出現頻度の高い「課題」「バイト」を含んでいた。グループ2は10語で構成される最も大きなグループであり、最も出現頻度の高かった「勉強」が含まれていた。グループ3は6語で構成され、「授業」「復習」が含まれた。グループ4は8語で構成され、「ベッドメイキング」「練習」「実習」が含まれていた。グループ5は「学校」「明日」の2語のみで構成されていた。素データでは、『明日は学校』『明日は学校祭』という表現だった。グループ6は「家」「準備」「帰る」の3語で構成されていた。グループ7は「基礎」「看護」の2語のみで構成されていた。素データでは『基礎看護技術』として用いられていた。グループ8は「体育」「楽しい」の2語のみで構成された。

考 察

KH Coder 3 を用いてA看護専門学校1年次の学生が記載した学生支援ツールを分析したことで、「勉強」が頻出語のうち最も多く、共起ネットワーク図におけるグループがすべて学校生活に関する語を含んでいたことが分かった。また、友人関係の困難についての記載は確認できなかった。これらの結果について順に考察し、最後に教育現場における学生支援ツール活用の示唆について述べ

る。

学生支援ツールに最も多く出現したのは「勉強」という語だった。この「勉強」は、他の語と語をつなぐ役割も大きかった。「勉強」は学校生活上必ず直面する問題であり、テストや課題の多さ、授業、演習など、学校生活上のストレスの大半が学業に由来している¹⁴⁾という報告がある。本研究においても素データから、『生理学の勉強の仕方分からない』『バイトをしていて勉強時間取れていない』『どのような勉強をしたらいいでしょうか』等の表記が確認できており、学生にとって「勉強」は最も関心の高い話題のひとつであると考えられた。本研究が入学直後の1年次の学生が記載した学生支援ツールを分析対象としたこともまた、「勉強」の語が多かった原因の一つだと考えられた。医学部の1、2年生を対象にアンケートを取った小林らの研究では、相談の窓口があれば教員へ相談したいと解答した学生が1年生では半数を占め、2年生よりも多かった¹⁵⁾ことが述べられている。学習への関心や今後の学校生活における不安が高い時期の内容を分析したことが結果に影響したと考えられる。

学生は、学校生活に関連した内容を学生支援ツールに記載した。共起ネットワークにより作成された8つのグループは、どれも学校生活に関する語を含んでいた。入学後間もない時期にある学生が話題として取り上げるのは、自身の学校生活が中心であることが明らかになった。特に入学直後は教員との関係がまだ希薄な時期であると思われる。そのため、自由記載ができるとはいえ、その内容をある程度限定し、教員に知られてもかまわない当たり障りのない話題としたことが推測される。また相談したい内容として、学校生活に関する情報をやり取りの材料に使用した可能性が考えられた。

友達に関する悩みやストレスは、学生の悩みの中で最も多い⁶⁾といわれているが、本研究においては友人関係の問題についての記載は見出せなかった。これは、学生が相談内容と相談相手を選んでいることを示していると考えられる。中学生を対象とした調査では、生徒は友人関係に関わるような深刻な悩みを親や教員に対して相談することには抵抗感があり、相談相手から外す可能性がある¹⁶⁾ことが確認されている。さらに、大学生の悩みとその対処法について調査した研究では、学生が最も相談する相手は友達であり、教員などの学校関係者への相談はそもそも少ない⁵⁾ということ

が明らかになっている。医学部低学年へ向けた調査では、大学教員が相談窓口となったときに、交友・対人関係を相談したいとする学生の割合は低くなる⁹⁾と報告されている。これらのことを踏まえると、本研究においても学生は交友関係を相談する相手として、教員を選択していなかったと考えられる。

本研究において新入生の学生支援ツールの記載内容を分析した結果、看護専門学校へ入学後間もない学生は、学校関係の話題のうち、とりわけ勉強についての情報を教員に開示することが分かった。これまでの研究報告¹¹⁾¹⁷⁾と同様、特に新入生が教員に求める役割は、勉強や学業に対する助言・相談、慰め・励ましといったサポートであり、教員は学業継続を支援してくれる人として学生に認識されていると考えられた。A看護専門学校で独自に使用していたこの学生支援ツールは、3年間という長い学校生活を支えるために教員が具体的にどのような支援を行う必要があるのかを把握できる極めて重要な情報元であり、困難の早期発見、対応に役立つ可能性があると示唆される。

本研究の限界について述べる。調査対象が11名と少数だったため、今回の結果を一般化するにはさらに多くのデータが必要であると考えられる。

結 論

学生支援ツールに、最も多く出現した語は「勉強」だった。この語は他の語と語をつなぐ働きも大きかった。また、学生は話題の中心として自身の学生生活を取り上げた。入学後間もない時期の学生は、友人関係の悩みよりも、勉強を中心とした学校生活の情報を教員へ開示することが分かった。

利益相反

本研究において開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 住谷圭子, 甘佐京子, 松本行弘, 他: 看護専門学校生の学業継続に影響する要因, 人間看護学研究, 13, 43-49, 2015
- 2) 山口直己, 足立はるゑ, 城憲秀, 他: 高校から大学への移行に関する円滑な適応を目指して - 保健看護学科1年生が認知するストレス内容とコーピング, 中部大学生命健康科学研究所紀要, 9, 35-40, 2012
- 3) 今井弥生: 看護学生の学生生活継続における

- 問題と心身健康, 臨床福祉ジャーナル, 13, 7-13, 2016
- 4) 八島美菜子, 岡平美佐子, 成順月, 他: 看護系大学生の悩みと相談に関する実態について- 学生生活実態調査報告(Ⅲ) -, 看護学統合研究, 13(2), 55-60, 2012
 - 5) 山村りつ, 市瀬晶子, 引土絵未, 他: 大学生の「悩みとその対処方法」に関するアンケート調査とその結果- 自殺予防のための方策を探る -, 人間福祉学研究, 8(1), 103-119, 2015
 - 6) 西村美八, 富永真己, 岩島エミ, 他: 看護学生におけるストレスとコーピングの関連性の検討, 京都橘大学研究紀要, 43, 147-156, 2017
 - 7) 澤目亜希, 佐藤巖光, 上原尚紘, 他: 看護系専門学校生の抑うつ症状とストレス対処能力(SOC)との関連について, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 7(1), 89-92, 2011
 - 8) 橋本和幸, 植松晃子, 小川 渉, 他: 医療系大学の新生を対象とした学生相談室への認知- 年度別男女別の比較 -, 了徳寺大学研究紀要, 8, 63-78, 2014
 - 9) 小林民恵, 兵藤好美: 看護学生のストレスに影響を及ぼす要因, 岡山大学医学部保健学科紀要, 17, 17-26, 2007
 - 10) 石綿啓子, 赤石三佐代, 松田厚恵, 他: 看護学生の進路上の悩みとストレス対処行動の実態および成績との関連, 高崎健康福祉大学紀要, 3, 45-56, 2004
 - 11) 上野栄一: 内容分析とは何か- 内容分析の歴史と方法について -, 福井大学医学部研究雑誌, 9(1-2), 1-18, 2008
 - 12) 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析- 内容分析の警鐘と発展を目指して(初版), ナカニシヤ出版, 17-29, 京都, 2014
 - 13) 田中京子: KH CoderとRを用いたネットワーク分析, 久留米大学コンピュータージャーナル, 28, 37-52, 2014
 - 14) 土屋八千代: 看護大学生のストレス構造とマネジメント- 行動変容をもたらす体験学習 -, 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 2, 241-251, 2001
 - 15) 小林元, 菅原亜紀子, 福島哲仁, 他: 医学部1, 2年生への生活調査から低学年医学生支援を考える- 医学部低学年生の生活調査と学生支援 -, 医学教育, 41(5), 359-365, 2010
 - 16) 後藤安代, 廣岡秀一: 中学生が抱く「相談することに対する抵抗感」についての実態調査研究, 三重大学教育学部附属教実践総合センター紀要, 25, 77-84, 2005
 - 17) 山本純子, 近藤純子: 看護系大学の新生が求めるソーシャル・サポートの特徴- 社会人スキルとの関係から, 千里金蘭大学紀要, 12, 81-88, 2015